

光文社文庫

名探偵キャサリン傑作集

ミス<sup>ふり</sup>振<sup>そで</sup>袖殺人事件

山村<sup>み</sup>美<sup>さ</sup>紗



光 文 社



光文社文庫

名探偵キャサリン傑作集

ミス振袖殺人事件

著者 やま山村 むら美 み紗

---

昭和63年4月20日 初版1刷発行

発行者 大坪昌夫  
印刷 堀内印刷  
製本 榎本製本

---

発行所 株式会社 光文社  
〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13  
電話 東京 03(942)2241(代表)  
振替 東京 6-115347

---

© Misa Yamamura 1988

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。  
ISBN4-334-70718-1 Printed in Japan

光文社文庫

名探偵キャサリン傑作集

ふりそで  
ミス振袖殺人事件

山村美紗



光 文 社



目次

京 <small>きょう</small> 絵 <small>え</small> 皿 <small>ざら</small> の秘密	5
呪 <small>のろ</small> われた密室	83
ミス振袖 <small>かりそで</small> 殺人事件	129
針 <small>はり</small> 供養 <small>くよう</small> 殺人事件	181
割りこんだ殺人	219
京菓子殺人事件	277
解説 郷原 宏 <small>ごうはら ひろし</small>	341



きょうえざら  
京絵皿の秘密

## 1

日本で写した写真の整理をしていたキャサリンに、浜口一郎から電話がかかってきた。

「キャシイ。終い弘法に行きませんか？」

「えっ、シマイコーボって何？」

「夜店の大きいようなものです。アンティークな時計とか、植木だとか、面白いものをいっぱい売っていますから、どうかと思って」

「行くわ。行く。どこであるのかしら？」

「東寺の境内です。毎月二十一日が弘法さんの日なんです。十二月の二十一日は終い弘法といい、一月二十一日のは初弘法というのです」

「じゃ、何時に、どこへ行けばいい？」

キャサリンは、はしゃいでいった。賑やかなことが、大好きなキャサリンなのである。

「三十分後に迎えに行きますよ。でも今日は、車を停めるところがないので、タクシーで東寺まで行きましょう」

「オーケー」



一時間後、キャサリンと浜口は、終い弘法のにぎわいの中にいた。

弘法さんと、京都の人が呼んでいるこの縁日は、嵯峨天皇の頃、東寺を開いた弘法大師のゆかりの市である。

弘法大師は、承和二年の三月二十一日に、六十二歳で亡くなったが、その命日にあたる毎月二十一日に、大師の遺徳をしのぶ京の人々によって、この市が立つようになったという。

浜口がそう説明すると、キャサリンは、

「じゃ、もう、千数百年も続いているのね」

と驚いた顔をした。

大変な人出なので、うっかりすると、二人は離ればなれになる。

広い境内はもちろんのこと、築地塀の沿道にも千軒を超える露店が立っている。

昔なつかしい駄菓子や鼈甲あめ、カルメ焼きの店をすぎると、次は、おもちゃの店が並んでいる。

キャサリンが木の鉄砲をとって、おすと、「ポン」と音がした。杉鉄砲である。

「さあさあ、びっくり鉄砲は千五百円やで。水鉄砲は千円や」

おもちゃ屋が叫ぶ。

山菜を売っている店もあれば、ロウソクを売っている店もある。

「あら、竹細工だわ」

キャサリンが立ちどまった。

そこには、大小さまざまのかごや、ざる、熊手などが、所狭しと置いてある。キャサリンは、竹かごを一つ買った。

「今は、プラスチックばかりだから、日本らしくていいわ」  
二人は、夢中で見て歩いた。

浜口も、久しぶりに、昔の日本の情趣にふれて満足だった。  
しばらく行くと、今度はがらくた市が見えてきた。

キャサリンの眼が好奇心で光る。

ござの上には昔の柱時計もあるし、明治時代のものらしい消防団の印半纏しるしはんてんと防空頭巾、箆しほもあれば、大正時代のランプも並んでいる。

からくり人形もあれば、瀬戸物ばかり売っているござもある。

「長火鉢、船篋ふねだんす、手文庫などもありますね」

浜口も珍しそうだった。

キャサリンは、陶器の店の前に立った。

「アメリカの友人が見たら、欲しがるものばかりだわ」

キャサリンは、青磁せいじの壺をとりあげてみたり、大きな絵皿を眺めたりして大喜びだ。

つまらないがらくたも、金髪きんぱつのキャサリンが珍しそうに手にとっていると、何か素晴らしい

芸術品に見えるから不思議だ。

「これは、サムライのお屋敷にあるようなお皿ね」

「番町皿屋敷ですか？」

浜口がひやかすようにいったが、キャサリンは耳に入らないらしく、一生懸命、選んでいる。結局、キャサリンが選んだのは、その大皿二枚と壺と盃と、小さな陶器のお重じゆうだった。

「イチロー、値切ってくれない？」

「えっ？」

浜口がびっくりした。

「お願い！ 値切ってちょうだい。こういうところでは、値切って買うものだと、イチローがいったでしょう？」

「弱ったな。じゃ、これ、いくらにしてくれるかな？」

浜口は小さい声でいった。

にやにやしなから、そのやりとりをきいていた店番の男は、

「よしっ！ 外人さんやから負けた。半額や」

と喋ってくれた。

ほっとして、新聞紙に包んでもらい、今度は、時計と手文庫のところへむかった。

「もう値切るのは嫌ですよ。どうしてもというのなら、こちらから値段をいって、お金を出し

10  
て、それが駄目なら、いらないういっただらどうですか？」

「わかったわ」

キャサリンは、ここでは、時計を二つと金蔀<sup>まきえ</sup>絵の手文庫を買った。

「持ちましよう。でも、もうこれ以上は無理ですよ」

それでも、キャサリンは、あつちこつち寄り道をして、品物を買ひ、ホテルに帰ってきた。

「ああ、面白かったわ。イチロー、どうもありがとう」

「いえ。でも、こんなにどうするんですか」

「手入れをして、アメリカに持って帰るの。みんなが喜ぶわ」

「やれやれ」

「なんていったの？」

「いえ、べつに」

## 2

夜、浜口がキャサリンを訪ねると、キャサリンは、一生懸命、陶器をみがいているところだった。テーブルの上には、すっかりきれいになった手文庫や古い時計が、並べてある。

「驚きましたね。こんなにシャレたものになるとは」

浜口は、テーブルの上を見廻しながらいった。

「時計はみがいて色を塗り、文字盤をかえたの。手文庫ははげたところにエナメルを塗って、つや出しをしたのよ。ついでに赤い房もかえたわ」

「絵皿は、きれいになりますか？」

「それが、なかなかきれいにならないの。盃やお重じゆうはきれいになったんだけど」

「しばらく水を入れてから、みがいたらどうですか？」

「そうねえ、それがいいわ」

キャサリンは、その絵皿に水を入れて、テーブルの上におくと、手をふいて、椅子に座った。  
「あ、そうだわ、この絵皿が入っていた桐の箱に、何か書いてあるの。読んでくれない？」

「いいですよ」

浜口は、ほこりで黒くなった木箱のふたをとりあげた。

「えーと、北山家きたやま所蔵と書いてあります。この絵皿は、北山という家が持っていたんですね。

それから、横に何か書いてありますよ。……あれ、取扱とらへい注意です。……『水洗厳禁』つまり、水洗いをしてはいけなさと書いてありますよ。水で洗ってはいけなかつたんですよ」

「どうしよう？ 絵がはげてしまうのかしら？」

キャサリンは、あわてて水を張った絵皿をのぞきこんだ。

「あらっ、大変。イチロー、これを見て！」

「何ですか？ 絵がはげてしまったんですか？ 泥絵具だったんでしょ？」

いいながら、そばへやって来た浜口は、「おやつ！」と行って、絵皿の中を凝視した。絵皿の内側にあった赤い模様は、すっかり消えて、字が浮かび上がっている。

「東という字だわ」

キャサリンにも、それくらいの漢字は読める。

しばらく字を見つめていた浜口が、

「ああ、こういうの、お酒の盃なんか、よくありますよ。盃にお酒をつぐと、エロティックな絵が出てきたりするの」

「本当？ でも、これは隠さなければいけないようなエロティックな絵じゃないわよ。字よ。なんのために隠したのかしら？」

「北山家の当主の名か、この絵皿を作った人の印しるしじゃないでしょうか？ とにかく遊びですよ」

「このお皿は四枚あって、それぞれ、東・西・南・北と書いてあるんじゃないかしら？」  
キャサリンは、勢いこんでいった。

「もう一枚の絵皿は、どうですか？」

「一枚ずつやっているもので、まだ水につけてないわ。すぐ水を入れてみるわ」

キャサリンは、もう一枚の絵皿を、大切そうにかかえてきて、コップで水を入れた。

二人がじっと見ていると、すぐに字が浮き上がってきた。

「あっ、出たっ、寺という字だ」

浜口が叫んだ。

「じゃ、東ひがし・寺でら、……あっ、東寺とうじのこと？」

「うーん、偶然だなあ、東寺で買った陶器に、東寺と出るなんて。この持ち主は東寺の信徒だったのかな？」

「わかった！ この絵皿の持ち主は、きっと別の宗教だったのよ。しかし、本当は東寺の宗教を信じていたので、密ひそかにそれを絵皿にして、夜など、水を入れて、浮き上がる字を見て、お祈りをしていたのじゃないかしら？」

キャサリンが眼をきらきらと輝かせていった。

「うーん。昔、キリスト教が弾圧された頃、観音様の像の中に、マリア様の像を入れておがんでいたというのはきいたけど……」

「そう、それなのよ」

「しかし、それだったら、東寺は弘法大師だから、弘・法と入れるか、真・言・宗と書くような気がするけどなあ……」

浜口はあまり賛成ではなかった。

「単なる遊びでしょう」

「じゃ、なぜ、水洗いしてはいけないと、箱にわざわざ書いてあるの？ 水洗いすると、この隠し字がわかってしまうからでしょう？ だったら、何か意味があるんだわ」

「この絵皿、二枚だけでしょうか？ あと何枚かあるとしたら、それに何が書いてあるかで、どんな意味を持っているか、わかるんじゃないやありませんか？」

浜口がいうと、キャサリンが手を叩いた。

「そうだわ。きつとほかにもあるのよ。東寺に行ってみましょう。そして彼にきいてみたいわ」

「彼って？」

「この絵皿を売っていたおじさん」

「もう八時だけど、まだいるかなあ」

「レッツ・ゴー」

しかし浜口は、じっと箱書きを見つめていた。

「どうしたの？ イチロー」

「この箱書きには、『六一一』と『六一三』と書いてあります。ということは、絵皿は六枚あるということになりますね。そして、東寺ではなく、東なんとか寺なのかもしれません」

「東なんとか寺というところ……」

「たとえば、東福寺とか、東本願寺とか、間に何字か入りますから、東寺とは違いますね」



「早く行きましょう。他の絵皿を探しに」  
キャサリンが、せきたてた。

3

二人が東寺に着いたのは、九時少し前だった。  
そろそろしまいかけている店もある。

「走りましょう」

キャサリンがいい、浜口が続いた。

絵皿を売っていた店は、まだやっていた。

「よかった！」

キャサリンはふうふう息を切らしながら、中年の男にいった。

「今日、私たちが買った絵皿と同じもの、もうないかしら？」

キャサリンは、ポラロイドカメラでとってきた絵皿の写真を見せた。

「またこの皿のことかいな？ この皿は、おたくらが買って帰ったあと、女の人が来やはって、二枚買うて行かあった分で、おわりや。その人も、同じものがなんとか手に入らへんかというてはった」